

比較教育学先史研究

石井 均

序

われわれは従来、日本の比較教育学の発達に関する研究、特に先史研究について若干の発表を行ってきた。⁽¹⁾それらは、基本的には海外の教育・文化事情の撮取という視点から、海外の教育・文化の情報受容の過程を歴史的に考察してきた。

しかし教育や文化の情報は、ただ単にわが国の人々が、わが国にもたらずのみならず、他国の人々がわが国の教育・文化をその国へ伝えることも同時に行われてきたのである。わが国の人々が他国の教育・文化と接触して大きな衝撃を受けたのと同様に、他国の人々もわが国(や他の国々)の教育・文化に接して驚きの声をあげているのである。

フリーザーやブリックマンの研究によって、ヨーロッパの人々がヨーロッパ地域内の他国の教育について記述しているのはよく知られているが、⁽²⁾ヨーロッパ以外の地域での教育情報についてはそれほど詳しくは言及されていない。

そこで本稿では、ヨーロッパの人々が日本や中国を含む東洋の教育・文化事情を伝えたことに焦点を絞って検討してみたい。西洋の人々にとっては、東洋の教育・文化情報は色々な意味において有益であったろうし、逆にそれらの記述によって、東洋や日本における教育に対する考え方をある程度客観的に考え直していくこともまた可能なのである。すなわち、西洋人の目を通して東洋の教育の特色を知ることができるとも言えるのである。

なお、本稿では長い東西交渉の中で、書物によって初めて東洋の諸事情を伝えたとされるマルコ・ポーロから扱っている。また、西洋に伝えられる教育情報が飛躍的に増大するのは一九世紀になってであるが、ここでは一応日本の幕末期

(一九世紀中頃)までに留めおいている。

(一)

東洋の教育・文化事情を最初にヨーロッパに伝え、それが記録として残されているのは、イタリア人商人マルコ・ポーロ(Marco Polo, 1254-1324)による有名な『東方見聞録』(一二三〇九年以前)である。マルコはモンゴル人政権元朝に仕え、実際に見聞した中国やインドの教育について『見聞録』で触れている。たとえば、「カタイ人の掟と慣習」については「カタイの人々は絶えず学問に意を注ぎ科学の探求を志しているから、学識も深く風習も純良であって、この点についてはほかのどの国民よりも優秀であるというのがマルコ氏の見解であった。……もし両親を立腹せしめたり扶助を怠るような息子があれば、それこそ不孝の事実が実証され次第、不孝者の嚴罰を職掌とする官署がこれを制裁する」⁽³⁾と述べている。

また、大マング国の教育については、「王は毎年二万人を越える幼児を世話していたが、その次第はこうである。この国では嬰兒が生まれると、貧しくてとても養育できない母親はすぐにこれを捨て児にする。王はこれらの嬰兒をすべて引き取り、各々の運星を簿籍につけたうえで常雇いの多数の乳母たちの手もとに渡し、各地でこれを哺育せしめる」⁽⁴⁾と述べている。なお、カタイとは契丹(キタイ)の訛り、マングとは蛮子(マング)の訛りで、前者は華北の中国人を指し、後者は江南の中国人を指す言葉である。

さらにマルコは、インドの教育についても触れており、「大マーバル地方」の教育を次のように述べている。

「……この地では、息子を持った父親はその子が十三歳に達すると、家に置かないでこれを世間に出し、それ以上は食事の面倒をみない。彼等に言わせると、十三歳になったのだからもう十分に自分の食いぶちを自分でくめんし、取り引きを行って儲けるだけの甲斐性は身についているはずであって、自分たちも現に十三歳からそうやってきたのだと言う。こうして息子のめいめいに二十グロッシ相当の貨幣を与え、それで商品を仕入れ利益をかせぐ資本たらしめる。父親がこのような処置に出るのは、息子たちが何事につけても老練機敏となり、もって商取り引きに慣れるようにとの願望からなのである。」⁽⁵⁾

このように、東洋の教育・文化事情を最も早く西洋に紹介したのはマルコ・ポ

「ロの『見聞録』であり、その信憑性は疑問でもあるが、西洋には大きな影響を与えたことは否定できない。

(二)

十六世紀になると、いわゆる「地理上の発見」に伴って西洋人の東洋での活躍が目立ちはじめた。とりわけ商人や宣教師の働きは活発であった。商人の中には一獲千金を夢見て東洋に向った者もあり、その中の一人にポルトガル人フェルナン・メンデス・ピントをあげることができる。彼は一五〇九年から一二年のあいだに生まれ、一五三七年からの二十一年間に東洋での生活を自伝風に綴ったものが『東洋遍歴記』である。「十三回捕虜になり十七回身売られた」という著述は、著者の体験、伝聞・文献による知識とフィクションを巧みに織りまぜた文学作品であるともされている点に注意は必要である。しかし、これが東洋での教育について触れているということでは価値あるものである。⁽⁶⁾

ピントは、中国の都の教育事情について、「すべての不具者と身寄りのない人々に対する救済について」の中で、次のように述べている。

「……『貧者の学校』と呼ぶ家がある。そこでは……父親のわからないすべての失業青年に公教要理、読み書き、手仕事を、自らの手で生計を立てることのできるようになるまで教えており、このような家は市内に二百軒、いや恐らく五百軒以上にのぼるであろう。また、市の命令によって、乳母として、父母のはっきりわからないすべての捨子に乳を与える多数の貧しい女たちのいる家と同じように沢山ある……そしてその捨子たちは成人すると、今述べた例の家に入れられそこで教育を受ける。」⁽⁷⁾

このような中国の特色ある孤児院等は、西洋人の目には新奇なるものとして写ったに相違ない。

十六世紀にはまた、キリスト教の宣教活動も活発になってきている。宣教師達は本部に様々な報告書を送っており、報告書の中にも東洋の教育・文化事情が述べられている。しかもそれらは、商人達のものに比べてはるかに組織的なものであり、場合によっては詳細をきわめるものもある。こうした報告書の一つにマテオ・リッチによるものをあげることができる。

マテオ・リッチ (Matteo Ricci, 1552-1610) は、イタリアの宣教師であつて、特に彼の報告書では中国の試験制度がこと細かに記述されている。たとえば、

科挙の制度は四書五経を重視することを手短かに説明した後で、秀才料の試験について次のように述べている。

「……この学科で受験しようとする者は作文の試験によって三段階の称号を受ける。第一の段階は国王から各地方ごとに任命された提学と呼ばれる大学者の監督下に各都市の学校と呼ばれる場所で行なわれる。」⁽⁸⁾

マテオ・リッチは、この他にも挙人の試験および進士の試験について詳細な報告をしたためている。異質の文化に接し、また異質の教育に接し、彼の報告書もまた西洋人を驚かせたに違いない。

同様の例として、イエズス会の宣教師ルイス・フロイス (Luís Frois, 1532-1600) の名をあげることができる。ルイス・フロイスはポルトガル人で、一五六二(永祿五)年に来日し、日本での積極的な宣教活動を行い、宣教師としてイエズス会に報告書を送る一方で、第三者的立場からも当時の日本の政治、経済、社会、文化一般について具体的な記録を数多く残している。(大部にわたる『日本史』を著したことでも有名である。)

それらの記録の一つ、一五八五(天正一三)年に加津佐でまとめられた小冊子『日欧文化比較』をとりあげることができる。⁽⁹⁾ この小冊子は、イエズス会屈指の日本通であるフロイスによって記述されているだけに、単なる好奇心からではなく安土・桃山時代の生活、文化を「ヨーロッパでは……、日本では……」と書き始められており、まさに文化比較と言える興味深い内容が述べられている。

たとえば、その第三章「児童およびその風俗について」では次のように述べられている。

「われわれの間では普通鞭で打って息子を懲罰する。日本ではそういうことは滅多におこなわれない。ただ(言葉?)によって譴責するだけである。」⁽¹⁰⁾

「われわれの間では世俗の師匠について読み書きを習う。日本ではすべての子供が坊主 Bonzas の寺院で勉学する。」⁽¹¹⁾

「われわれの子供はその立居振舞に落着きがなく優雅を重んじない。日本の子供はその点非常に完全で、全く賞讃に値する。」⁽¹²⁾

「われわれの子供は大抵公開の演劇や演技の中ではにかむ。日本の子供は恥ずかしがらず、のびのびしていて、愛嬌がある。そして演ずるところは実に堂々としている。」⁽¹³⁾

日本の教育情報を西洋に送った者として、フロイスとはほぼ同世代の人物ヴァリ

ニャーノの名を忘れることはできない。ヴァリニャーノ (Alejandro Vahgnano, 1537-1606) は、一五七九年以降三度にわたり「巡察師」の職命を帯びて来日したイエズス会の司祭である。彼は日本人および日本の教育について次のように記述している。

「国民は有能で、秀でた理解力を有し、子供達は我等の学問や規律をすべてよく学びとり、ヨーロッパの子供達よりも、はるかに容易に、かつ短期間に我等の言葉を読み書きすることを覚える。また下層の人々の間にも、我等ヨーロッパ人の間に見受けられる粗暴や無能力ということがなく、一般にみな優れた理解力を有し、上品に育てられ、仕事に熟達している。」⁽¹⁴⁾

この他にもヴァリニャーノは、その巡察師としての職務上から「日本人の為の神学校の必要、並びにその経営方法」という提言も報告しており、その中で日本に作るべき神学校のあり方を、日本人特有の礼儀、風習、儀礼を参考としながら述べている。⁽¹⁵⁾

西洋の宣教師や商人達のもたらす東洋の教育情報は、このようにして徐々にその量を増してきたのであった。

(三)

十七世紀に入ると商人達はさらに活動を広げ、東洋においてもその活動自体が組織的になってくる。彼ら商人の報告の中においても東洋の教育情報が読み取れるのである。

その一つとして、まずアビラ・ヒロンの報告をあげることができる。アビラ・ヒロンは、十六世紀末から十七世紀にかけて約二十年間にわたり、主として長崎に在住したイスパニア商人であった。⁽¹⁶⁾彼の「転訛してハボンとよばれている日本王国に関する報告」すなわち『日本王国記』には、日本の子どもの教育について次のように述べられている。

「子供は非常に美しく可愛く、六、七歳で道理をわきまえるほどすぐれた理解力を持っている。しかしその良い子供でも、それを父や母に感謝する必要はない。なぜなら父母は子供を罰したり、教育したりはしないからである。」⁽¹⁷⁾ところでオランダは、十六世紀の末からアジア各地に進出するようになっており、今日のジャカルタにその中心拠点を置いた。一六二一年にはこれをバタヴィアと命名し、城塞と町とを漸次整備し、総督を中心として軍隊も配置した。これ

と並行して、インドネシアをはじめとし、北は日本、台湾から、トンキン、コウチ、カンボジア、シャム、パタニ、マラッカなどの東南アジア地域、ビルマ、インド、セイロン、ペルシア、アラビアなど南および西南アジア地域にも商館を設け、貿易の拡大と発展に力を注いでいる。そしてこれらのアジアのほぼ全域にわたる要塞や商館からは、その地方の情報を常にバタヴィア総督府に送ってきている。⁽¹⁸⁾

各地の日記を作ることは、一六二一年に東インド会社が総督府に命じたところで、ただちに各地の商館等からバタヴィアに託送されはじめ、一八〇八年に記録廃止が命じられるまで続けられている。⁽¹⁹⁾

この頃、日本は鎖国政策をとり、中国や朝鮮、オランダを除く他の国々との国交を閉ざしている。したがって日本事情の西伝と言えば、長崎からオランダを経由した情報にはほぼ限られるようになる。その意味でも鎖国下日本で果たしたオランダ商館の役割はきわめて重要である。

とりわけ第八代オランダ商館長フランソア・カロン (Francois Caron) は、日本滞在二十余年にして当代随一の日本通であり、そのカロンの手になる『日本大王国志』は、『オランダ東インド会社の創建並に発展誌』(一六四五年刊行)の巻末に収められた日本事情の鋭い観察記録であり、ヨーロッパ人の好奇心と探求心を十分満たしているものである。⁽²⁰⁾

「強き王国日本の正しい記事」と題する著述の第十九問には、「子供の教育」について興味深い記述が見られる。少々長いが次に引用しておきたい。

「彼らは子供を注意深く、また柔和に養育する。たとえ終夜喧しく泣いたり叫んだりしても、打擲することはほとんど、あるいは決して無い。辛抱と柔和とを以て有め、打擲したり、悪口したりする気を起さない。子供の理解力はまだ発達していない。理解力は習慣と年齢によって生ずるものなるを以て、柔和と良教育とを以て誘導せねばならぬというのが彼らの解釈である。七・八・九・十・十一及び十二歳の子供が賢しくかつ温和であるのは驚くべき程で、彼らの知識・言語・応対は(老人の如く)、和蘭では殆んど見られない。丈夫に成長したといっても、七・八・九歳以下の小児は学校へ行かない。この年輩で修学してはならぬという理由で、従って彼らの一群は生徒でなく、遊戯友達の小会で、これが教育に代り、彼らは野生的にまた元氣一杯になる。学校へ行く年齢に達すると、徐々に読書を始めるが、決して強制的でなく、習字もまた楽し

んで習い、否々ながら無理にするのでは無い。常に名誉欲をうえ付け、名誉に關しては他に勝るべしと激励し、短時間に多くを学び、これによって本人及び一族の名誉を高めた他の子供の事例を挙げる。その方法により彼らは鞭撻の苦痛が「もた」らずよりも、更に多くを学ぶのである。」⁽²¹⁾

また、鎖国下日本の長崎からは各種の報告書が絶えずバタヴィアに送られており、これらの資料からも日本の文化・教育情報が読みとれるのである。たとえば、「一六四四年および一六四五年、日本の長崎より時々受け取りたる報告書その他の書類の抜粋」において、捕虜となったオランダ人の江戸での取調べが記録されている。内容は、宣教師やキリスト教に關する取調べが中心であるが、その尋問の第七問「オランダにもまた宣教師、司祭または教師ありて説教をなし、一般人民に教うることをイスパニアおよびポルトガルにおけるごときか。……」という問いに対しては、「オランダには説教師を称する教師あり。學者にして彼らの聖書によりて人民に教えキリスト教を説けり。この司祭は国より俸給を受け、妻とともに他の市民の間に在つて尊敬を受け、潔白質素に生活せり」⁽²²⁾との答がみられる。

この他にもヨーロッパの言語や宗教等についての尋問もみられ、これからは鎖国下の日本にあつて当然のことではあるが、日本人のヨーロッパ文化事情に対する理解の少なさが、逆にあざやかに浮きぼりにされているのである。

さらに、東インド総督に宛てた日誌・記録の中には、台湾の教育に關する記述も多く見られる。「一六四七年十一月十一日より一六四八年一月九日に至るゼーランジャ城日誌抜粋」には、オランダのキリスト教布教に關する学校の様子がよく示されている。もちろんこれらは、キリスト教学校に關してであるが、たとえば、十二月五日の視察報告では次のように述べられている。

「新港、目加溜灣および大目降の諸村には日々三種の学校が開かれ、少年の学校（その中に多数の青年および若干の成人男子がある）では、綴り字、読み方、書き方、諸祈禱および人間の感謝すべきことに關する新しい問答の教授を行つてゐる。二十歳ないし三十五歳までの者がいる成長した男子の学校が一つ。最後に男子と殆ど同じ年齢の成長した女子の学校が一つあるが、その中に多数の少女がいる。」⁽²³⁾

オランダ人の東洋貿易での活躍は、朝鮮の教育情報をも西洋にもたらしことになった。一六五三年、ヘンドリック・ハメルらの乗り組んでいたデ・スベルウェ

ール号は、済州島南部の海岸で難破した。彼らは長期間にわたる抑留を余儀なくされていたが、二六六年、ヘンドリック・ハメル以下八名が脱走に成功し、長崎へ到着した。長崎滞在中にハメルの作成した報告書に基づいて一六六八年には数種類の出版物が現われている。これらをまとめたものが『朝鮮幽囚記』である。⁽²⁴⁾

彼の報告書は、朝鮮の政治、経済、文化一般にまでわたるものであるが、その中にはもちろん教育についても触れられている。たとえば「僧侶は少年たちを集めて、読み書きを一生懸命教えます」⁽²⁵⁾とか「貴族や自由民は彼等の子供たちを大切に養育し、教師の監督下に置いて読み書きを充分に覚えこませます。彼等はこれのことについては非常に熱心で、その方法は丁寧でかつ巧みです。教師は子供たちに対してつねに先人の学識と、高い学識のおかげで出世した人々のことを例に挙げます。子供たちは昼も夜も勉強にはげみます。こんな幼い生徒が自分の習う知識の大部分を含む書物を立派に説明することができるのは、驚くべきことです」⁽²⁶⁾との記述がみられる。

また、「毎年各州の二、三の都市で（学生たちの）集会が開かれ、太守は州内に委員を派遣し、彼等を武芸と学問について試験をします。……後太守の前で試験を受けます。太守は、彼らがある役目につくのにふさわしいと認めた場合には、その姓名を宮廷に通知し」⁽²⁷⁾その後国王によって任命された委員によって試験を受け、昇進させられることが記されている。⁽²⁸⁾

かくして東洋の教育情報は、断片的ではあるが東インド会社を経由しても西洋に伝えられたのである。

(四)

十八・十九世紀になると、東洋の教育情報は従来とは比較にならないほど膨大な量が西洋に伝えられる。そこでここでは、その中でも代表的なものにとどめおきたい。

十八世紀にもイエズス会の宣教師達は世界各地で布教活動を行っており、彼らは不断に本部に対して数多くの報告書等を送っている。そして中国などからも興味深い東洋の教育情報が送られている。

たとえばイエズス会の宣教師ダントルコル師が某夫人にあてた書簡（一七二〇年十月十九日、北京において）や、同じくイエズス会の宣教師ゴービル師がトゥールーズの大司教ヌモン現下にあてた書簡（一七二二年十一月、広東省において）

などでは、棄児を集めて養育する育嬰堂という公共機関について宣教師達がいかに注目していたかがわかるのである。⁽²⁹⁾ また、ダントルコル師の書簡には、中国の教育の一端が次のように述べられている。

「子供たちをもつ父、弟たちをもつ兄は、息子や兄弟を早い時期に鍛え、これらの義務を教え、かれらに両親を敬うこと、兄に尊敬の念をもつことを教育しなければならぬ。子供が成長したら、かれらを徳に導き、日常生活の義務を教え、学問への愛を鼓吹する必要がある。このようにして育てられた青年は必ず名誉ある存在となり、優れたひとびとの間に列することとなる。」⁽³⁰⁾

さらに宣教師達は、中国の書物を使用しながら中国の周辺地域の教育事情をも西洋にもたらししており、その中には琉球に関するものもみられる。北京の宣教師ゴビルは、康熙の末年に冊封副使として琉球に赴いた翰林院編修徐葆光が皇帝に奉呈した二冊本の報告書に基づいて、⁽³¹⁾ 琉球の歴史、地理、言語や風俗、習慣を報告している。この中には次のような記述がみられる。

「……学問をやっているものはシナ文字を知っており、この文字を通して、互いに自分たちの考えを伝え合うことができます。」

国内に広がっている坊主たちは日本のアルファベット、ことに伊魯花^{イロハ}と呼ばれるアルファベットの定めに従って読み書きを教えるための学校をもっている。

……また多くの青年がこの地でシナ語の読みと会話を習うようになってから、さらにはまた他の多数の若者がシナの都の国立学院（国子監）で教育を受けるようになってから大いに増大しました。⁽³²⁾

また、十八世紀末の東洋の教育情報を西洋に伝えたものとして、マカートニーの日記をあげることができる。ジョージ・マカートニー（Macartney, G.）は、国王ジョージ三世のイギリス全権大使として、一七九三―一七九四年に、乾隆帝治下の中国へ行った折に日記を記している。⁽³³⁾ この日記はいわば公式記録を補うものとして、当時の中国事情を知る上でも重要なものであることは言うまでもない。マカートニーは、中国の様々な側面に触れているが中国人との会話の中で「……そうした話から察知されたことは、中国人は医術ないしは外科術や科学的知識の点で、いかに他の諸国民に遅れているかということ」⁽³⁴⁾ を観察するのである。さらにマカートニーは、科挙の予備試験の行われる建物などについても若干の報告を行っている。⁽³⁵⁾

すでに述べたように、十九世紀になると東洋の教育事情を伝える資料は枚挙にいとまのないほどである。そこでここでは、日本の幕末期に関するもののみ二―三例示しておきたい。

江戸時代末期になると、西洋各国の使節・技術者が数多く日本に來航しまた滞在している。

たとえば一八五八（安政五）年、日英修好通商条約締結のために來日したエルギン伯に随行したローレンス・オリファントは、日本の教育情報を西洋に伝えた先人の著作を参考にしながらも、断片的にはあるが次のように述べている。

「……この記事からみると、日本には国民教育についてわが国よりもっと広く普及している制度があるようである。そして他の点についてそうでないとしても、とにかくこの点に関するかぎり、彼らがわれよりも進歩していることは明らかであると思われる。ときどき街を通っているとき、私は学課を学習している子供たちの楽しい喋々の声を聞いた。」⁽³⁶⁾

「私に不思議に思われたことは、江戸に滞在している期間を通じて……子供は無数にいるけれども、叩かれたり、何か虐待を受けたたりしているのを一度も見ることがない。」⁽³⁷⁾

また、イギリスの初代駐日公使である、有名なラザフォード・オールコック（Sir Rutherford Alcock, 1809―1897）も在日三年間（一八五九―安政六）年一六二（文久二）年の記録を残している。それが有名な『大君の都』であり、この中には日本の子ども達についての観察がある。

「イギリスでは近代教育のために子供から奪われつつあるひとつの美点を、日本の子供たちにもっているとした方がいい。すなわち日本の子供たちは自然の子であり、かれらの年齢にふさわしい娯楽を十分に楽しみ、大人ぶることがない。かれらはひょうきんな猿を背負った旅芸人を追っかけてゆくし、そのような楽しみからえられるような幸福より重厚な幸福は望まない。」⁽³⁸⁾

さらに幕末に、長崎海軍伝習所で学生の指導にあたったオランダの海軍将校カッテンディーケも、日本の教育の様子を次のように記録している。

「日本人がその子らに与える最初の教育は、ルッソーがその著『エミール』に書いているところのものと非常によく似ている。多くの点において、その教育は推奨されるべきである。しかし年齢がやや長ずると親たちはその子供たちのことを余り構わない。どうでもよいといった風に見える。だからその結果は遺

憾な点が多い。一般に親たちはその幼児を非常に愛撫し、その愛情は身分の高下を問わず、どの家庭生活にもみながっている。見様によっては、むしろ溺愛しているともいえよう。

……子供らがどんなにヤンチャでも、親たちがその子供を宥めているところなど殆んど見ることがない。ましてや叱ったり懲らしなどしている有様はおよそ見たことがない。日本の子供は恐らく世界中で一番厄介な子供であり、少年は最大の腕白小僧であるが、また彼等ほど愉快な楽しそうな子供たちは他所では見られない。児童は無茶に早期に学校に行くようなことはない。そうして教えを受けねばならぬ時は、緊張する時よりも却って寛ぐ時だと思っているらしい。⁽³⁹⁾

ルイス・フロイス以来、わが国に訪れた西欧人はほぼ一致して日本の子どもたちの自由奔放さを見ている。またムチによる教育がないことにむしろ驚きの気持ちを読みとることができるのである。キリスト教世界の伝統的教育に比べて、教育の違いの大きさは、彼らにとってはきわめて新奇なるものと写ったに違いない。

結 語

以上に述べてきたように、本稿では比較教育学先史を、東洋教育情報の西伝の視点で把えてきた。これらの東洋教育情報は資料上の制約から、日本や中国にはば限定せざるを得なかったが、これらの資料から以下のことが言えよう。

まず第一に、様々な記録等を残した者が東洋に到った動機であるが、それらは商取り引き、宣教活動、外交目的などであった。特に商取り引きの場合などは商売そのものよりもむしろ冒険心、好奇心が際立つ場合さえある。

したがって第二に、報告者の資質という点からみれば、彼等は当然教育に関しでは素人といえることができる。宣教師についてはある程度教育に対する知識の豊富な報告もみられるが、やはり彼らも教育に関しては素人と言う方がよからう。

第三に、記述ないしは報告された内容の選択基準は異国情緒的なものがほとんどであると言えることである。報告や記述された内容は、自国もしくは西欧諸国の文化と比較してどの分野においても新奇なるものに重点が置かれているのである。

第四に、事実を報告しながらも、教育に関する印象記的記述となっており、また偶然的、断片的なものであることである。いずれの報告・記述も文化、地理、

風俗、習慣の中にたまたま教育に関する記事がみられる程度で、非体系的、非科学的なものであると言えよう。

なお本稿では、繰返し述べているように東洋教育情報の西伝という視点で見ているが、日本、中国の教育情報以外はほとんど触れられていないし、また日本、中国の教育情報にしても重要な資料を見落としていることもあろう。しかし、こうした点は御指摘いただいて比較教育学史をさらによりよきものとしてゆきたい。

引用参考文献

- (1) 二宮皓・石井均「日本の比較教育学の発達に関する研究」『広島大学教育学部紀要』第一部、第二五号、一九七六年。拙稿「日本における比較教育学」(中原豊編者『比較教育学』有信堂、一九八一年、所収)。拙稿「日本における比較教育学の発達に関する研究」『岡山県立短期大学研究紀要』第三二巻一號、一九八三年。
- (2) Fraser, S. E., and Brickman, W. W., *A History of International and Comparative Education: Nineteenth Century Documents*, Givle III: Scott, Foresman and Company, 1968.
- (3) マルコ・ポーロ、愛宕松男訳注『東方見聞録』1、平凡社、一九七〇年、二七〇頁。
- (4) 『東方見聞録』(同右書) 2、一九七一年、二八頁。
- (5) 同右書、2、一八二頁。
- (6) メンデス・ピント、岡村多希子訳『東洋遍歴記』1、平凡社、一九七九年、一〇三頁。
- (7) 『東洋遍歴記』(同右書) 2、一九八〇年、八八―八九頁。
- (8) 平川祐弘著『マテオ・リッチ伝』1、平凡社、一九六九年、一一九頁。
- (9) 『日本王国記・日欧文化比較』(大航海時代叢書XI) 岩波書店、一九六五年、四九七―八頁。
- (10) 同右書、五三七頁。
- (11) 同右。
- (12) 同右書、五三九頁。
- (13) 同右。

- (14) ヴァリニャーノ著、松田毅一他訳『日本巡察記』平凡社、一九七三年、四頁。四年、二〇二二〇三頁。
- (15) 同右書、七七―八〇頁。
- (16) 『日本王国記・日欧文化比較』（前掲書）一七頁。
- (17) 同右書、六〇頁。
- (18) 村上直次郎訳注、中村孝志校注『バタヴィア城日誌』1、平凡社、一九七〇年、序九頁。
- (19) 同右書、三七―三七二頁。
- (20) フランソア・カロン原著、幸田成友訳著『日本大王国志』平凡社、一九六七年、一頁。
- (21) 同右書、一六六頁。
- (22) 『バタヴィア城日誌』（前提書）3、一九七五年、四一頁。
- (23) 同右書、三七―三七二頁。
- (24) ヘンドリック・ハメル著、生田滋訳『朝鮮幽囚記』平凡社、一九六九年、二〇―二四〇頁。
- (25) 同右書、四五頁。
- (26) 同右書、四八―四九頁。
- (27) 同右書、四九頁。
- (28) 同右。
- (29) 矢沢利彦編訳『イエズス会士中国書簡集』4、社会編、平凡社、一九七三年。
- (30) 同右書、八六頁。
- (31) 『イエズス会士中国書簡集』（同右書）5、紀行編、平凡社、一九七四年、はしがき一八頁。
- (32) 同右書、二四三―二四四頁。
- (33) マカートニー、坂野正高訳注『中国訪問使節日記』平凡社、一九七五年。
- (34) 同右書、一八八頁。
- (35) 同右書、一九三―一九四頁。
- (36) 岡田章雄訳『エルギン卿遣日使節録』雄松堂出版、一九六八年、一六三頁。
- (37) 同右書、一八四頁。
- (38) オールコック著、山口光朔訳『大君の都』下、岩波書店、一九六二年、二二―六頁。
- (39) カッテンディーケ著、水田信利訳『長崎海軍伝習所の日々』平凡社、一九六

平成元年 九月 七日受付
平成元年十一月十六日受理